

## 精神科病院の IT 導入

田中 亨治

独立行政法人国立病院機構 菊池病院

演者の前任地「医療法人横田会 向陽台病院」(以下同院)では、2004 年 6 月から電子カルテシステム「Alice」(株式会社メディブレイン)を導入、運用してきた。演者は、1997 年から同院において非常勤医師として勤務していた傍ら、2003 年頃から電子カルテシステムの導入準備のための技術的および運用上の助言を行う立場にあった。2007～2010 年度には同院の常勤医師として、院内電子カルテ委員会の一員となったが、ここでは主に医療業務および情報技術の見地から委員会に助言を行い、電子カルテ委員や病院職員からの相談に乗る役割を担った。

演者が常勤医として同院に勤務し始めた 2007 年 4 月時点で、電子カルテシステムは、導入から 3 年が経過したにもかかわらず、当初からほとんど改良されないままの状態であった。漫然と時間が過ぎ、委員会に限らず職場全体に苛立ちと諦めの感情がただよっていた。まず、職場の感情面からの立て直し、電子カルテ委員会を中心とした改善プロセスの構築が急務であった。それだけでなく、企業体力の乏しい中小精神科病院において、技術者不在のままシステムの改善・改良を進めることが要求された。

最終的に、2007 年から 2010 年の 3 年間で、臨床検査オーダー(外注)の伝票廃止、臨床検査項目セットの更新、医事システム更新に対する電子カルテ側の整合、カルテシステムのメジャーバージョンアップなどの成果が得られた。2009 年からは、院内の教育活動の一環として「電子カルテニュース」を発行し、毎月 1 つのテーマについて解りやすく解説し、各職員に情報システムや情報セキュリティへの関心を持ってもらうよう、活動を継続している。これらの成果のうち、特にカルテシステムのバージョンアップにおいては、病院側から提出した要望が反映された改良が行われ、現場職員や病院経営者からのポジティブな反響も大きかった。

6 年間にわたる運用を経て、電子カルテの存在は、同院の診療業務の基盤として欠かせないものになっている。同院における電子カルテの運用は、いわゆる教科書的に模範的なものではないが、いわゆるヒト、モノ、カネ、チエの全ファクターにおいて不利な立場にある中小病院において、一定の成功を収めた事例たり得ると自負している。本発表では、中小病院における「身の丈に合った」電子カルテ運用の一例として、電子カルテの運用状況、改良プロセス、今後の課題などの事項を中心に考察を加えて述べる。